

# 労働運動再生への道すじ

自動車総連会長 加藤裕治

今年7月、世界の労働界に衝撃が走った。AFL-CIOが分裂したのである。グローバリゼーションの進展と新自由主義政策は、多くの国で労働組合を痛めつけ存在感を低下させている。日本も例外ではない。労働組合はそのまま沈滞して行くのか？懸念と叱責の声は内外で強くなっている。しかし私自身は、今、組合リーダー達が運動のパラダイムを思い切って転換し、労働組合の機能と価値をもっとシンプルに取り戻せば、必ず再浮上できると考えている。

\* \*

## ○舞台で演じる主役は組合員

ナショナルセンター連合の誕生は、組合員の期待を膨らませた。16年経ち、評価が一向に高まらないのはなぜか。それは、その政策実現力に期待するあまり、単組・産別が連合に自分達の利害に関わる課題を持ち込み過ぎているからだと考えている。

連合に集うリーダーは連合に持ち込まれる個別課題を果敢に切って、運動テーマを税や社会保障など勤労者共通のものに絞り込む勇気を持つべきである。それが組合員の共感と連帯を呼び覚まし、未組織労働者との絆を作り出すことになる。

もうひとつ、これまで私たちは、政策の実現度に重きを置き過ぎた嫌いがある。政党や役人はロビイストとしての連合役員が恐いのではなく、その後にいる700万人の目が恐ろしいのである。運動の力点と評価軸を「実現力」だけでな

く「結集力」にも置いてみよう。一緒に行動し汗をかき感動できたか。そういうシンプルさが今必要だ。連合がそのように個別利害を超越した集団になれば、社会の期待も高まるはずだ。

## ○運動の舞台を社会に広げよう

### (産業・企業の呪縛からの離脱)

労働組合はもともと社会的な存在であった。労働組合は社会で活動できる組織として大きな強みを持つ。それは労働組合の組織力、統制力、資金力である。

さらに、たとえばNPOなら大抵シングルイシューのみで結合しているが、労働組合は災害支援から街の清掃まで何でもする「何でも屋」である。これは大きな社会的資産ではないだろうか。実際に、労働組合という組織に対する社会からの信頼は案外高い。社会経済生産性本部が行った信頼度調査では、政治、行政、企業より労働組合への信頼度のほうが高かった。労組役員はもっと自信を持っている。

労働組合はこの強みを生かし、もっと社会と連携すべきである。社会と結びつくことで組合員はライフスタイルや価値観を広げていく。それで身についたコンセンスは組合を強くする。社会性を身につけた組合は企業にとって手ごわい相手となるはずだ。

## ○舞台で演じる役者をもっと増やそう

自動車総連は今年、パート社員



のみでなく契約社員の組織化に踏み出した。これまでこうした労働者は需給の調整弁と位置づけ、組織化は考えなかった。しかし、契約社員が増加するにつれ、「別の集団」のままでは安全や品質問題も懸念され、組織化がテーマとなったのである。

私はこれを、組織拡大のみにとどまらない好機と捉えている。たとえ短期であれ、同じ仕事に携わる者同士仲間になろうということなのである。この連帯が一旦築ければ、たとえ別の企業に移っても、仲間との友情が心に刻まれ、労働者としての連帯の輪が広がる。さらに迎える組合員の側もその交わりの中で、意識する社会が広がる。これも労働組合の社会性を高めることになるはずである。

\* \*

ネオリベラルな政策は社会を階層化し、質を劣化させる。それを阻止するためには国民一人ひとりの社会への参加意識を高めるしかない。それができるのが労働組合だ。だからこそ労働組合は再生しなければならないし、できると確信している。